郷土室だより

第 50 号

昭和60年12月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025

八町堀襍記（ざつき） 一〇

安藤菊二

。八丁堀の材木問屋―紀文の古跡―炭薪問屋―大坂屋庄三郎

。八丁堀人物誌　1立川焉馬　2四世川柳　3落語家達　4出世頭今泉也軒翁　5狂歌師達　6角力取宮城野　7八丁堀の蔵書家

○八丁堀と材木問屋

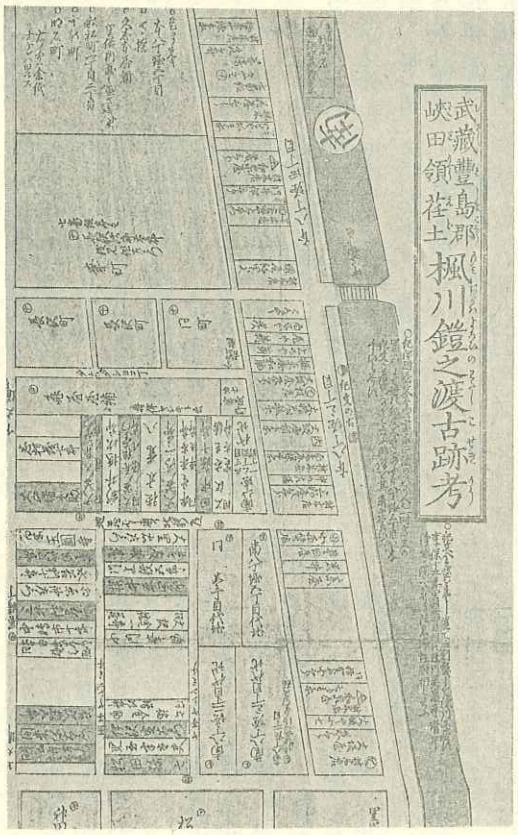
明治五年に陸軍省の要請に応じて、東京府庁において編纂した『東京府志料』巻三河渠志に、記して、

八町堀、上は京橋の水路に続き、下は築地の海に入る。寛永年間通運便利の為めに、海口より長八町の堀を鑿し、故に名くと云。南岸は第一大区十小区、大富町南八町堀一二三目なり。北岸は十五小区松屋町三丁目本八町堀一町目より五町目に至るまで之に係る。延袤白魚橋より海口まで九町三十間、幅二十二間。

〔舟筏〕廻船一艘、五大力船一艘、伝馬船二十六艘、伝馬造茶船五十艘、茶船二十八艘、荷足船九艘、日除船十五艘、押送船七艘、湯船一艘、小艘七艘。」とあり、更に、本文に入って同書巻之二十二、第一大区十五区小区の条下に

本八町堀一町目、八町堀の名義は寛永中通船便利のため長さ八町の堀を鑿らしめ、高橋下より外濠に通ぜし故に名とす。○一説町方書上に……町内名主岡崎十左衛門の先祖三州岡崎宿続き八町村の者にて天正十八年徳川氏入国の時扈従して江戸に来り、此地を賜ふ。地勢岡崎の八町堤に似たれば八町堀と称すと云。案するに後年南八町堀の町名ありし故に、此地は本の字を冠らせしならん。明治二年此町の上納地を又合併す。

と記し、物産として、わずかに一丁目の下駄、製造高五百雙と、四丁目の葛籠製造高三百六十箇を記述するにとどまる。船数に比して商店の著るしく尠かりしを思わしめる。



（池田英泉編　弘化２年）

○紀文の古跡

○池田英泉の『楓川鎧之渡古跡考』を見ると、本八丁堀三丁目の河岸地に「◑紀文の古跡」と刻し、傍らに、紀伊国屋文左衛門ハ宝永正徳の頃の人也。一時高名の冨家にて、世に紀文大尽といふ。本八丁堀三丁目ハみな紀文の居宅なりと云ふ。俳諧を其角に学びて千山と号す。○紀文全盛を尽し、衰て后剃髪して深川に居す。享保十九年四月廿四日没す。深川霊巌寺塔中浄等院に葬る。法名帰性融

相と云ふ。

と書き添えてある。

材木屋紀文の居宅のあった、本八丁堀の河岸地（北桜河岸）は二丁目から五丁目にかけては、材木問屋や炭薪問屋が軒を接していたようで、河岸添い町の景観は、英泉の『鎧渡古跡考』からも充分に察しがつく。

『諸問屋名前帳』にも

板材木問屋、熊野問屋組合

本八丁堀五丁目 家持　伊賀屋茂兵衛
本八丁堀五丁目 利七地借　吉野屋五郎兵衛
本八丁堀四丁目 五人組持地借　雑賀屋安三郎
本八丁堀四丁目 三五郎地借　和泉屋藤三郎
本八丁堀四丁目 家持　宝田屋太郎右衛門
本八丁堀三丁目 家持　栖原屋　和助
本八丁堀三丁目 家持　大坂屋庄三郎
本八丁堀三丁目 長兵衛地借　大島屋熊三郎
本八丁堀一丁目 善兵衛地借　栖原屋治兵衛
本八丁堀四丁目 利兵衛地借　青梅屋吉兵衛

と載っているのを見る。

○炭薪問屋

江戸の材木問屋の名簿の古いものは残っていないが、炭薪問屋の方は、二百三十年ほど前のものが残っている。当時炭薪問屋の内に小売をする店があって、仲買の商売が薄くなって難渋するとて奉行所に訴え出た結果、奉行から、職分を明確にするよう申渡しがあり、その時に「鯨船鞘付、川辺古問屋人数定名前書」の提出を見たのであった。

これによって、諸問屋五百二十四人がきまった。（東京市史稿、産業篇一七所収）三五五～四一二頁）

この名簿に、八町堀地区の材木問屋の名が、すでにかなり多く見え、江戸時代中期における、この地区の問屋分布の状況を知ることができるので、書抜いてみることとする。嘉永の諸問屋再興時と比較する便宜ともなるであろう。（ただし南八丁堀は除外した）

壱番組

一古問屋 本八丁堀五丁目 喜平店　川部や　新八
　此者近来改名新兵衛
　此問屋株、天明五乙巳年二月外え譲渡ス
一同　本八丁堀三丁目 家主　青木や　伝七
一同　同所三丁目　家主　上総屋亦兵衛
一古問屋 本八丁堀弐丁目 家主　伊勢屋弥兵衛
一同　同所同町忠兵衛店　大坂屋庄三郎
一同　同町　嘉右ェ門店　杉島屋勘兵衛

弐番組

一竹丸太炭薪問屋
　本八丁堀壱丁目 家持　雑賀屋源兵衛
一同　本八丁堀弐丁目 忠兵ェ店　大坂屋庄三郎
　此者儀、壱番組古問屋へ加入仕
　鯨船御用相勤候
　付ケ札 壱番弐番 両株所持之者
一同　此者儀、右同断御用相勤候
　付ケ札 同断
一同　同町家持　伊勢屋弥兵衛
一同　同　同町五丁目家持　上総屋又兵衛
　付ケ札 同
一同　同町家持　房州や吉兵衛
一同　本八丁堀四丁目 徳平店　伊丹屋九右衛門
　此者儀同断 同所甚兵衛店　青梅や　伝七
　付ケ札 同
一同　川島屋嘉右衛門
一同　小島屋次郎兵衛
一同　山本屋　平吉
一同　大島屋平右衛門
一同　斉藤や宗右衛門

三番組

一、竹丸太炭薪問屋
　本八丁堀五丁目 家主　升屋　与兵衛
一、竹丸太炭薪問屋
　本八丁堀四丁目 庄右ェ門店　万屋　宗次郎
　（以下、亀島町の問屋一〇軒、与作屋敷立跡の問屋二軒などあれど省略す）

対照の便宜のために、嘉永再興時の『諸問屋名前帳』に載る、この地区の「竹木炭薪問屋」の名を掲げる。

竹木炭薪問屋、川辺一番組

本八丁堀二丁目 家持、但阿州住　大坂屋庄三郎
　右同地　伊賀屋小三郎
本八丁堀三丁目 家持　三河屋八三郎
本八丁堀一丁目　丸屋　吉兵衛
本八丁堀五丁目　伊賀屋　富七
本八町堀三丁目　伊賀屋　元蔵
本八町堀五丁目 家持　丸屋五郎兵衛
本八丁堀五丁目 家持 安政六年　竹屋八三兵衛
本八町堀三丁目 家持、但阿州住　大坂屋利兵衛
本八町堀二丁目 安政七年 同三丁目　種木屋啓次郎
本八町堀二丁目　小川屋源兵衛

川辺八番組

本八丁堀五丁目　和泉屋勘之助
本八町堀四丁目　駿河屋　清七

川辺角二番組

本八町堀四丁目 家持　宝田屋太郎右衛門
本八町堀四丁目　信濃屋喜三郎
本八町堀五丁目 家持　松屋　佐兵衛
本八町堀五丁目　小池屋小兵衛
　同右　紀伊国屋源八
本八丁堀四丁目　日高屋仁三郎
本八町堀五丁目 但駿州住　浦屋　金次郎
本八丁堀四丁目 元治元年　近江屋　文助

川辺十五番組

本八丁堀五丁目　三河屋吉兵衛
　（以下省略）

○大坂屋庄三郎

てのの字の商号で知られた大坂屋庄三郎店は、天下に冠たる藍玉の製産地阿波国の出身で、徳島県名東郡北新居村を本拠とし、本名は久次米兵次郎と言った。阿波を本拠とする藍玉問屋の江戸出店は、藩の強力な統制の下に、江戸では、本材木町、本八丁堀、船松町、上柳原町など水運の便利な地に店舗を開いて盛業を続けていて、文化六年刊行の『江戸十組問屋便覧』（仮題）には

藍玉同屋之部

本材木町四丁目あいや弥兵衛。同丁あいや与吉郎。本八丁堀二丁目大坂屋庄三郎。同三丁目阿波屋吉右ェ門。同丁あわ屋吉三郎。同丁あハ屋与市。同丁あい屋善右ェ門。同丁大坂屋利八。同丁大坂屋万次郎。船松丁一丁目江島屋利助。同丁阿波屋林右ェ門。上柳原丁はりま屋九兵衛。同丁あハや十兵衛。同丁くまのや伝右ェ門。同丁あいや直四郎。同丁島屋久兵衛。同丁あハや源蔵。三十間堀一丁目あいや文太夫。同丁あハや兵助。水谷町住吉屋又次郎。同丁大坂屋利兵衛。同丁あハや久兵衛。

（以下一六軒省略）

などの諸店の名を見ることができる。

これら藍玉問屋の内、藍製産の高位を占めていたのは、本材木町の藍屋与四郎店で、このお店は現在も三木産業株式会社として盛業を続けている。

三木文庫に所蔵される「嘉永五子、新口ヨリ積切マデ藍玉表」という藍玉江戸積送り高番付に

大関　五千八拾四本　藍　八上
関脇　四千九百拾四本　江　八六
小結　四千九百拾本　大　て
前頭　四千五百四十二本　播　八に小槌
前頭　四千五百四十一本　野　才

（以下略）

と刻してあるが、（故）後藤捷一氏の註記によると、藍は江戸本材木町四丁目藍屋与四郎。江は、船松町一丁目の江之島屋利助。大は、本八丁堀二丁目大坂屋庄三郎。播は、築地上柳原町の播磨屋九兵衛。野は、本船町の野上屋嘉右衛門であるという。

文政一二年の江戸の大火に八丁堀一円も全焼して、竹尾覚斎の『薪煙見聞日札』に「本八丁堀ての字大坂屋ハ、江戸にて伏見屋と同様にて、先江戸両家と人も知るものなる所、土蔵七戸、前外居宅焼失。大に迫に及ぶのよし。」と書いているのを見ると、いかにも立派な家構への大商店だったことが知れる。『狂歌江戸名所図会』に、この八丁堀の阿波店ての字を詠んだ狂歌が八首も載っている。

番匠がかんな遣ひのよき品をての字の見せでひさぐ材木　語吉窓喜樽

材木を揚るての字の丸太がし木口にうずもみする阿波店　和朝亭国盛

口も手も八丁堀のその中にわけてての字ハゆび折の店　有信亭友成

つかみ取まうかる板の水揚にぬれしての字もあはの本店　東風のや

材木のての字の店ハ帳面もおくもの多くありて世話しき　更科庵月芳

川岸揚の板に杢目の浪さへもうてるての字や見せの汐時　花や

藍瓶にうづ巻見する紺かきのつどふての字も阿波店にして　更科庵月芳

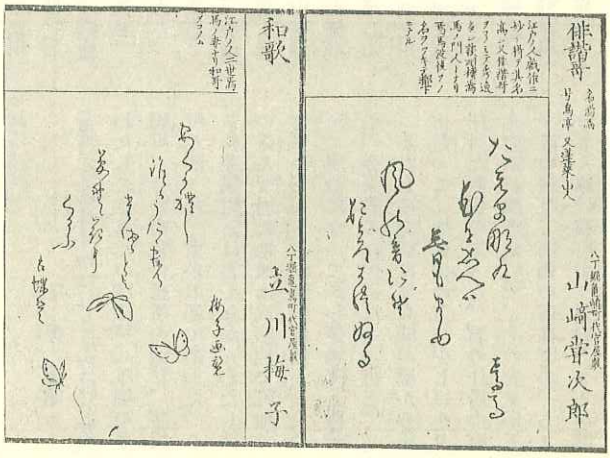
海苔まきにうづをも見する鳴戸鮨八丁堀の阿波の門前　和風亭

大坂屋庄三郎家については、なお、後日譚があって、『徳島県史』に次のような記事を見る。

明治初期に、名東郡新居村の久次米兵次郎は「て印」の商号で全国に知られた一流の富豪として長者番付に名を連ね三井・鴻池・渋沢・安田と共に日本銀行の設立を創唱し、大倉喜八郎と肩を並べる威勢があり、久次米銀行は三井銀行と同列で、藤田銀行とともに中国地方の経済を左右したという。東京では藍商のほか畳表・海産物・諸国物産を取扱い両替店を兼ね、また木材商を営んだが、これが深川木場における県人のめざましい発展の基礎となったのである。（三六八頁）

「徳島県における産業革命は、全国の大勢よりもやや遅れて進み、金融機関も、明治十年に国立八十九、十二年に久次米、十五年に徳島、二十九年に阿波商業、三十三年に阿波農工の諸銀行が開業したが、私立となった八十九銀行と、久次米銀行が、金融恐慌のために破産して、県下の財界に大きい衝撃を与えたのである」（全書三七四頁）

『書畫薈粋』（天保三年刊）



八丁堀人物誌

八丁堀の与力屋敷の借家には、医師や画家、書家として名を得た人達が多く住んでいたが、与力や同心の中からも風変りな人物が出ている。戯作を好んで、後には落語界に君臨した二代目立川焉馬や、川柳三代目を襲いだ同心人見周助といった人々である。

1 立川焉馬

戯作者、烏亭焉馬、二代目。『書畫薈粋』（畑銀雞著 天保三年刊）に、

江戸ノ人戯作ニ妙ヲ得テ其名高シ。又俳諧哥ヲコノミテ秀逸多シ。談洲楼焉馬ノ門人トナリ、焉馬没後ソノ名ヲツキテ都下ニナ（鳴）ル。

と評し、住所を八丁堀亀島町代官屋敷山崎甞次郎と載せている。江戸南町奉行所の与力を勤めていた人だからである。延広真治氏によれば、二代目焉馬は与力の身分にありながら、遊蕩のため家督を弟に譲り、分米を得、気随な生涯を過ごし、文政二年焉馬を襲名して立川家元と称して、落語界に君臨、亭号を立川に変えさせたりした。また相撲を好んで行司となり、式守鬼一郎と称したという。文久二年七月没。七一才。妻みよは、御狂言師の傍ら、和歌・絵画をよくし、立川楳と称した。

四世川柳『狂句百人集柳樽』（天保年6刊）　歌川国直画

天保三年版『書畫薈粋』に、

八丁堀亀島町代官屋敷　立川梅子

江戸の人二世焉馬の妻なり。和歌をこのむ。

あくがれし誰がうたゝねのたまかとよ夢野の花にくるふ古蝶は

と載せ、『江戸文人寿命附』には、住所を深川一之鳥居とし、

たはれたる芸はさておきよみうたと手跡で名をば江戸に立川

極上々吉寿八百五十年

と載せている。

2 四世川柳

前句付点者川柳の四代目は、八丁堀の同心、人見周助が、文政七年に襲名している。眠亭、風梳庵賤丸と称し、此の人に至って、従前唱え来った前句附を狂句と改め（狂歌人名辞書）俳風狂句元祖と称した。『狂句百人集柳樽』（天保六年刊）の著あり、書中に

狂句元祖四世川柳

夜学にふけて埋火もほたる程

の句を載せている。天保八年（一八三七）引退。弘化元年二月五日に六七才で没した。

3 落語家達

八丁堀の同心組屋敷の貸長屋は、裸一貫、その日暮しに近い日雇い人や、舌耕を業とする落語家達の絶好の棲家であった。『新燕石十種』第四巻に収める『落語家奇奴部類』は、幕末弘化二年に二代目扇橋の撰する所の書であるが、八丁堀住として掲げる落語家は二代目立川百馬を筆頭に三十名を数える。以下、その人達の芸名を掲げる。

立川百馬。二代目立川焉馬。二代目立川善馬（俗に今川奴と云）。立川小善馬（二代目善馬悴）。立川白馬。石井文馬。紫檀楼古喜。三扇亭岩藤。鶴声亭里生。鶴遊亭里松。鶴屋万助。大筒万八。かやば町住三升亭小鉄。鯉遊亭談志。東生亭扇勇。二代目春風亭柳勢。藤盛亭鉄山。面京亭楠枝。入船喜蔵。赤毛舎馬丈。隅田川馬石。三田住山亭馬久二（後に八丁堀に住す）。材木町住土橋亭りん馬（後に八丁堀に住す）。土橋亭しん馬。二代目立川善馬。門人、善馬同居立川善橋。同立川善寿。同立川善蔵。同立川小善馬（善馬悴也。八才にて初て席へ出る）。二代目司馬竜生。始め扇橋門人扇幸。後に扇好と字改。後に三代目雲亭司馬竜生と名乗る。日暮に碑を残す。

米のめし喰よこじきの花のもと

嘉永三戌六月十六日に卒す。真月庵酒楽信士。谷中。

4 出世頭、今泉也軒翁

八丁堀の同心の家筋から出て、後に学者と鑑識家として知られ、帝室博物館美術部長などを歴任し、大正五年に大倉集古館長となった今泉也軒翁は、この地の出世頭と称してもよいであろう。

也軒翁のことは、原胤昭翁が『江戸文化』第五巻第二号に「今泉先生の生い立ち」という題で追憶談を書いておられる。

原　胤昭

（前略）今泉君はわたしとは竹馬の友。わたしの生れたのは江戸八丁堀の茅場町、今の市電停留所の辺だ。茅場町の四ッ角、東角の邸であった。ここに茅場町とは書いたが、わたし共の住んで居た地域は武家地で町地でないから、本当は町名は無かったのだ。明治になってから茅場町と称号し、今泉君の住居辺は北島町と。

わたしの実家は佐久間の邸から南へ向って、地蔵橋の方へ少しばかり往った西側であった。君の住居の直ぐ向ふが幽霊横町で、その先きがドブ湯の横町、同側の南横町が、ちゃうちん駆け横町で、君のうしろが歌人加藤枝直、千蔭先生などの住居であった。

わたしは幼少にして君の生家原の養子となったので、どうでもかうでも一人前の与力にならねばならない運命に陥り、専ら与力勤向の練習稽古をさせられ、今泉君のやうに聖堂に通うと云う事は出来なかった。歳も上であったから遊び友達も群が違った。併し何しろ住居が目と鼻の先き程の近い所であったから朝夕心易くした。且つ君の御尊父覚左衛門氏は年寄同心で、同心仲間の長者であった。素と町方と云う組は、与力五十人、同心二百五十人、之を南北二タ組に編し、与力二十五人、同心百二十五人を一団とし、隔月に主務を執り一切の訴願を受附け処理した。之を月番奉行所と云ひ、一方を非番奉行所と云ひ、前月受附けた訴願を処理するのである。

又一ト組与力二十五人、同心百二十五人を五組に分ち、一番組より五番組と称し、組内同心の古参者若干を年寄と呼んだ。君の御尊父覚左衛門氏も年寄衆であった。

御尊父は同心の中に重要視された深慮篤学の人で、わたしどもも深く尊敬させられた老輩であった。町方組内の与力と同心の間柄、応対の懸隔は甚だ距離の遠いものであった。与力は同心を眼下に見下げ、之を呼ぶにも苗字を呼捨にした。尚与力の家族も同じように、平素の交際にも苗字を呼捨にしたものだが、父兄の訓導もあったろうか、今泉氏に対してのみは、今泉のおぢさんと呼ばされた。

覚左衛門氏は、わたしの実父佐久間健三郎や、実兄佐久間長敬が、枢要の公務を執るに当っては、同班の役向に在った故に、朝夕の出入瀕繁なものがあった。故にわたしも御尊父には寧ろ雄作先生よりも、より厚き親しみを受けました。云々。

亡兄今泉雄作略歴

廣田金松記

今泉雄作、幼名亀太郎、初号文峯又常真居士、父は江戸南町奉行支配、組同心今泉覚左衛門(元長)、嘉永三年六月十九日八丁堀北島町(現日本橋北島町)に生る。野田笛浦に就て学び、書法を高林二峯に受く。十六才昌平学校に入り、明治の初め廃校退学す。某英学塾に通ひ、横浜居留の英国人某に接して英語の実習に勉む。御用達商小野組に迎えられ、真(マコト)新聞編輯長に聘せらる。

明治十年五月大学南校仏語教師仏国人ジュリーの薦めに依りて、仏国リオン府へ赴き、その途次印度に回遊して梵語を研究し、彼地に於ては日本文学を教授す。偶々同地の東洋美術博物館々主ギメー氏と互に智識を交換して大に得る所あり、遂に館の客員となる。彼地に居ること七年。明治十六年帰朝し、文部省学務局に出仕して岡倉覚三氏と相謀り、文部卿に提議し、東京美術学校創立に方りて、岡倉氏は校長となり而して教職監理の任に膺(あた)れり。

京都美術工芸学校々長に転じ、帝室博物館美術部長、帝室博物館評議員に歴任し、前に古社寺保存会委員、東京絵画展覧会審査員等を命ぜらる。大正十一年十一月叙正四位勲三等、昭和五年九月九日動脈硬化症を発し六年一月二十八日陞叙従三位、午後九時四十分長逝す。享年八十二。

少きより書画骨董品を好み、年の壮なる頃既に支那古器物を愛玩す。井上竹逸嘗て七絃琴の弾法を伝へ、明清の楽をも嗜み、志野流の香道、石州流の茶道と共に造詣深し。南画は初め阪田鷗客にその法を問い、後来鑑賞と共に竹逸に私淑し、帝室博物館美術部長の職を辞して後は、広く古美術品鑑定の請ひに応じ、大倉集古館の館長に推され、日本美術協会その他日本書道会、木竹工芸会、陶工会等々考古に資する諸会に賛同せり。牛込区榎町宗柏寺に埋葬す。碑面无礙庵大空常真居士は生前自書に係る。その仏教に於ける真言密最精しく、又禾山禅師に参じて証明を受けたり。(『江戸文化』第五巻第二号。昭和六年二月号)

5 地区居住の狂歌師達

狩野快庵氏著『狂歌人名辞書』(昭和三年文行堂・広田書店発行)から拾ってみると、次の諸家を見出すことができる。

阿丸　慶阿丸、別号積善舎。通称清水虎吉、東都八丁堀に住す。文政頃。

焉馬　烏亭焉馬(うていえんば)(二代)初号松寿庵永年、別に七国楼と号す。通称山崎甞次郎、東都八丁堀の与力、狂歌は五側に属す。文久二年七月廿三日歿す。年七十一。小石川大雲寺に葬る。

琴升　五松亭琴升。通称永沢二郎。東京南八丁堀に住す。五葉亭社中。明治年間の人。

鶴群　東海園(二代目)。初号東薫亭。通称坂上甚兵衛。初代東海園船唄の男。東京日本橋坂本町に住す。明治廿八年九月廿八日歿す。年六十一。山谷念仏院に葬る。

年竹　藁部年竹。年竹庵。又什語斎と号す。姓竹田氏。通称未詳。東都八丁堀に住す。四方側判者。文化元年六月歿す。

奈賀良　娯面嘗奈賀良。通称三谷十蔵。東都南茅場町の人。(画像作者部類)

腹満　大般若腹満。別号悟智窓。通称

『狂歌水滸伝』（文政5年刊）

浅島壮太夫。名は東秀。字は恒山。五側判者にして、東都日本橋茅場町に住す。天保三年八月十七日歿す。年五十七、深川本誓寺に葬る。とあり、『狂歌水滸伝』（文政五年版）に、

氏ハ花形名ハ東秀。字ハ恒山。又悟智窓と号す。五門の詠人也。東都茅場街（住居せし跡也）に（其角が）住す。数歳筆道の師たり。弟子千人をこゆ。わけて大字を書するに妙あり。

かゆ杖にうたれしこしをなでながら子（ねの）日の松にひきのばしてん

として、お得意の大字の懸物を揮毫して立つ画像を載せている。

船唄　東海園（初代）船唄。初号宝珠亭。通称坂上甚兵衛、東京日本橋坂本町に住す。宝市亭社中の判者。明治三年正月廿四日歿す。年六十七。浅草吉野町念仏院に葬る。

鳳管　浅楽庵鳳管。別号桐斎。通称田中丘隅。元と武蔵川崎の人。東都八丁堀に住す。壺側。

（五百人一首）

6 角力取、宮城野

八丁堀居住の相撲取については、与力佐久間長敬翁の「嘉永日記抄」に次のような記事がある。

宮城野という相撲取代々八丁堀に住居し昔しから続いて出入を許す。当時、荒馬大五郎とよぶ小結の関取也。其弟子三四人つれて歳暮に来る。餅振舞う代りに餅米俵遣る仕来也。車に積み歓んで帰る。来春の御見物を願うと申也。春夏二度の本場所相撲には、番附と日々の勝負附を配る。是れは返礼也。組屋敷を一順し、旦那方から頂く餅米十五六俵、弟子に充分餅が食はせらるるといひし也。彼の代替りの時には与力中最負の人々出金して廻しを贈て遣る。これも昔しからの仕来りと也。（雑誌『江戸』第六巻、日記・紀行篇一九六頁）

7 八丁堀の蔵書家

市島春城翁の『擁炉漫筆』所載の、「安田椎園邸に於ける談書会」の中に八丁堀の蔵書家として、大久保紫香と樽崎海運の二人が話題に上っている。

△蔵書家で軟派の親玉といふと、早いところで**大久保紫香**あたりから、話は初めねばなるまい。古いところは別とすると、紫香あたりが維新後の蔵書家といっていゝだろう。自分たちの知ってゐる頃の紫香は、八丁堀に隠居してゐられた。表口に井戸のあった家だったと記憶する。本家は橋町の袋物屋（？）と思ふ。通称は源兵衛といった。（三村竹清氏の『本の話』によると、大正十五年二月二日六十三で歿した。）

△海運橋の袂にあった紙屋が**樽崎海運**。―元の第一銀行の前の土蔵造の窓から、本箱がギッシリ積んであったが、海運橋からよく見えた。役者、芝居ものの冊子が山とあった。その海運自筆の目録が出来てゐて、高橋太華山人が所蔵してゐた。

海運らしいものは「森羅万象」と称けた貼込帳で、各冊によって、内容種類が違ってゐるのがいくつもあった。その内で遊女の短冊を貼ってある分は、高尾、薄雲などの名太夫が、年代別にしてあったといふ豪華なものであったとは、内田魯庵さんの話。この「森羅万象」の役者の分は、役者といふ役者―名優、人気俳優をホントに網羅してあった。表が短冊で、裏が手紙其他の貼込といふのだから、キドッてゐる。これを相当な値で求めたのだが、その細絵が七枚ほどあって、春章などがあった。吉金がこの春章などの七枚の細絵だけを、元価で譲ってくれと懇望してゐた。

樽崎文庫には、黄表紙など真新らしいのが、三百冊からもあったと思ふ。海運の親は、その頃、十二大通の一人だったといふ事だ。

（『市島春城古書談叢』日本書誌学大系3、二七一頁～）

◇東京を語る会　第47回

日時　三月一日（土）午後二時～四時
演題　江戸の火消制度
講師　池上彰彦氏
（東京成徳短期大学教授）

◇「中央区年表」刊行のお知らせ

今年度は「江戸時代篇」中巻（元文元年（一七三六）～文化一四年（一八一七））を刊行します。今回初めての試みとして「江戸時代篇」上・中巻を御希望の方に実費で頒布することになりました。頒布時期・方法等については区の広報等でお知らせいたします。